

奈良市環境基本計画市民ワークショップ第6回分科会 会議録

＜日 時＞ 平成23年5月11日（水）午後7時～

＜場 所＞ 奈良市役所 北棟6階 正庁

＜プログラム＞

1. はじめに
2. 分野別将来像の検討
3. 分野別将来像の発表
4. その他

＜会議資料＞

- ①【資料1】第6回分科会プログラム
- ②【資料2】他市の分野別将来像（例）
- ③【資料3】各分科会の課題と関係すると思われる課（案）
- ④【資料4】第7～9回分科会の開催日程調整について
- ⑤【参考資料】市民アンケート分析等（田川委員より）
- ⑥第6回分科会 ふりかえりシート

＜出席者＞

【市民ワークショップ委員】出席26名（欠席7名）

池田敏泰、井上聆夫、井上雅由、岡本胤継、梶野博子、北浦由香、北端辰昭、河野元昭、小松弘子、島浩二、清水順子、瀬林傳、田川嘉隆、日月英昭、鶴保謙四郎、中川徹、船本知子、三宅明代、横山亜希子、植本茂、横田好弘、矢藤加寿子、石田美智男、岡野恵子、栗岡理子、村木正義

【事務局】12名

環境政策課 大西、桐山、新井、柴田、油谷、坂崎、平野、村井、吉留、杉田、松本、石橋

＜傍聴者＞

なし

<会議の概要>

1. はじめに

司会（事務局 柴田）より、本日の分科会の流れについて説明。その後、田川副代表による市民アンケート調査結果について分析。

◆市民アンケート調査結果の分析について（田川副代表）

パワーポイントを用いて説明。【参考資料】の満足度と重要度の関係分析において、満足度及び重要度指数が高いもの（右上）は残し、満足度が低いもの（左）について解決を図る事が必要。対策の順位としては先ずは図中左上を、その後左下を行うべき。具体的には、道路環境やごみ関係の部門が弱いのと、環境保全活動の教育の効果が薄いという事があるので、「道路環境」や「公共交通」、「水のきれいさ（河川）」、「ごみの処理・リサイクル活動」等について解決を図り、その後「公園・緑地」、「環境関連情報の提供」、「地域・学校での環境学習」等について対策を行う必要がある。

続いて事務局村井から分科会作業について、その後、第7～9回分科会の開催日程調整について説明。

2. 分野別将来像の検討

事前に配布済みの「【第6回分科会資料】各委員から出された分野別将来像」及び【資料2】他市の分野別将来像（例）を基に分科会ごとに分野別将来像を検討。（分科会ごとの検討の詳細については別紙<分科会の記録>を参照）

3. 分野別将来像の発表

検討の結果、最終的に決まった分野別将来像を紙に書き貼り出し、全体場で5つの分科会の発表が行われた。

【発表】 5分×5分科会、分野別将来像は以下のとおり。

環境教育

「未来を見据え、地域を動かす環境教育」

自然・歴史

【自然】すべての命を大切にし、自然と共生するまち

【歴史】歴史、文化を活かし、未来へ引き継ぐまち

生活環境

「きれいな空気・水・緑に囲まれた、
安全・安心・健康・快適な生活環境の実現をめざす」
「資源・エネルギーを大切にすまち」

都市環境

「市街地と農山間地のよさを活かし、
だれもがいつまでも安全で安心してくらすまち」

地球温暖化対策

「古都奈良で目指す低炭素社会」

※それぞれの分野別将来像を考えるに至った経緯や理由についても、別紙<分科会の記録>を参照

【発表】全体の質疑応答を10分間予定していたが、時間の都合上ふりかえりシートにて提出してもらう事になった。

4. その他

- ・次回第7回分科会は、5月30日（月）～6月3日（金）の間で各分科会の希望及び関係課との調整を行い、後日連絡する。
- ・今回のふりかえりシートは5月18日（水）必着で事務局へ提出願う。

環境教育	委員：岡本（リーダー）、島（サブリーダー）、船本、梶野、[黒飛]、 [南垣内] 事務局員：村井、吉留 []は当日欠席委員
-------------	--

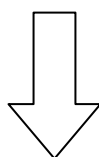
各委員から出された分野別将来像についての意見等

- ・環境学習が活かせるまちをつくる。アンケート結果にあるように、環境教育への意識が低い。また、地域に環境学習ができる場がない。
- ・アメーバ的に広がる組織が必要。以前に社会福祉協議会の公報に、中学生のゴミ拾い活動が掲載されていたが、こういうのに気がつかない人が多いのではないか。関心がない人は見もしないし、それゆえに費用等も出さない。まずは関心のある人が中心となって活動する必要があると思う。
- ・大学生ボランティアなど、若い力を活かさきれていないので、活用の方法を考える。
- ・組織がメインとなって連携する必要がある。
- ・学校である道徳授業の位置づけで、環境に関する授業を増やしてもらい、授業で用いるテキストを作るのはどうか。
- ・今のテキストにも環境分野はあるが、さらに高める方がよい。しかし、学校の中だけでなく、地域としてはどうするか、環境委員の学習会等をするなど。

分野別将来像のとりまとめ

意見を踏まえた各委員からの案

- ・施策を実践に移す教育の推進
 - ・未来を見据えた環境教育が行き届いたまち
 - ・地域を動かす環境教育



未来を見据え、
地域を動かす環境教育

自然・歴史	委 員：井上雅（リーダー）、岡野（サブリーダー）、中川、日月、横田、 横山、[伊藤] 事務局員：桐山、平野、石橋	[]は当日欠席委員
--------------	--	------------

●…各委員の意見

→…それに対する他の委員の意見

<各委員から出された分野別将来像に対する質問、意見等>

●出された分野別将来像には、それぞれ、『オアシス』『人類の宝』『環境との対話』など、エッセンス・大事な言葉が入っていると思う。しかし、それぞれ重点の置き方は異なっている。

自分の考えとしては、大震災を経て、自然の概念について考え方を変えなければならないというのがある。今回の大震災のように、町・村自体がなくなってしまうば「環境を守る」という話どころではなくなる。自然への畏怖、歴史に学ぶという姿勢が必要である。過去の歴史を見返すと、奈良も災害を繰り返している。今日の新聞にも奈良町の安全神話に警鐘を鳴らすというテーマで意見が出されていた。

●自然・歴史的財産を守るのに、これまでと違う手法を取ってはみてはどうかと考えている。

例えば、自分は東大寺に奉職しているが、お水取りについて、来年から心付けをもらったかどうかと提案している。奈良公園についても期間を決めて入場料をもらうなど検討してみてもよいのではないかと。1300年祭は無料であったから多数の観光客が来場した。有料だったらどうだっただろうか。

自然・歴史分科会の委員に対する提案として、東大寺や興福寺などの世界遺産をはじめとし、その関連施設など、市内の歴史的文化的施設を体験してみてもどうかと考えている。自分は人的なネットワークを持っているので施設の利用に協力できる。これまで机上の議論で進めてきたが、このあたりで、分科会委員が実際に歴史的文化的施設を体験してみるにより、今後の話し合いに活かすことができるのではないかと。

●各委員から出された分野別将来像を、さらに短い言葉でまとめなくてはならないのか。

→短さにこだわらなくてもよいのではないかと。

→自然・歴史分科会は、すでに短い言葉でまとめられているので問題ないと思う。

●自分が出した分野別将来像は、自分の考えとこれまでのワークショップの話し合いの内容を併せたものである。

自然と歴史は全く別のもので結びつけることが難しかったが、最終的に『共生』という語を用いて並列させた。

→確かに、自然と歴史はテーマが大きすぎる。最終的に両輪という形になっていけばいいので

はないかと思う。

●奈良を訪れる人は、人の手があまり入っていないところに癒しを感じていると思う。そこが、京都など他の観光地化された古都とは異なる点だと思う。

奈良は、歴史的文化的財産が自然と調和していると思う。今の状況を変えないためには、持続可能な取り組みをすべき。

●出された分野別将来像は、それぞれよくまとまっているのではないかと思う。前回のワークショップで、自然・歴史分科会としては、大震災を経ても基本的な考え方は変わらない、災害対策を盛り込む必要はない、との考え方が出た。しかし、出された意見を見てみると、自然災害について記載されているものもあり全体としてバランスは悪くないという印象である。この案をまとめて自然・歴史分科会として最終的な分野別将来像を出せばいいのではないか。

●出されたものを見ると、言葉は様々だが、イメージとしては同じようなものを浮かべているという印象である。

●大震災を経て、人が自然や原子力・放射能といった目に見えないものをコントロールすることは難しい、コントロールできる範囲で生きていくべきとの思いを強くした。また、過去の歴史・文化的財産を振り返り、それらに学ぶという姿勢が大切であると感じている。

<分科会としての提出案の検討>

(※各委員から出された分野別将来像の表を、上から順に①、②、…⑤とする。)

●「分野別将来像を考えた背景（現状と課題）」については、①が、項目が具体的に挙がっており内容もまとまっていると思う。

●「分野別将来像を考えた理由」については、①の『…生駒のトンネルを抜け、石切あたりから大阪平野を見ると緑のない廃墟のように感じます』という言葉は、奈良の豊かな自然を反語的に表していると思う。

また他の意見にも『人類の宝』であるとか『癒しを求めている』など、それぞれキーワード的なものがある。項目が箇条書きで挙がっている⑤をベースに、それらを盛り込んでいけばよいのではないか。

●これまでの意見をまとめると、12年前の基本目標とほぼ変わらない将来像になってしまう。10年以上という時を経て、大震災も経験しているのに、そのような将来像でいいのか。『自然・歴史を活かし、環境と対話する安全・安心な都市』がもっともふさわしいと思う。

→『環境と対話する』とは、どのような意味か。

●『環境と対話する』というのは、かつて『環境にやさしい』という言葉が使用されていたのに代わり、近年よく用いられるようになった言葉である。環境について常に考える、刻々と変化する環境に応じて対策を取る、というような意味である。

●『環境と対話する安全・安心な都市』を盛り込むと全体的な視点になってしまう。自然・歴史分科会として示す将来像としては大きくなりすぎると思う。

●『環境と対話する安全・安心な都市』は、概念として全体的な「望ましい環境像」に盛り込まれるよう、リーダー、サブリーダーに、今後の会議等で提案してもらうようにすればよいのではないか。

時間の関係もあり、分野別将来像を最終的に言葉にすることはできなかったが、委員間の意見の統一は得られたので、今日の話し合いの内容をもとに、リーダーに作成をお願いすることとした。

自然・歴史分科会分野別将来像

(全体の将来像)	環境(自然・社会)と対話する安全・安心なまち
分野別将来像	<p style="text-align: center;">【自然】すべての命を大切にし、自然と共生するまち 【歴史】歴史、文化を活かし、未来へ引き継ぐまち</p>
分野別将来像を考えた背景(現状と課題)	<p><現状></p> <ul style="list-style-type: none"> ○奈良には有名な神社仏閣、陵墓、古墳が多く、奈良公園一帯には野生シカがいる。 ○奈良の自然環境が時代とともに悪化してきている。 <ul style="list-style-type: none"> ・人工林、雑木林、竹林が荒れている。休耕田畑も増えている。 ・開発や自動車の増加で緑が減ってきている。 ・外来動植物が増え、ホタルなどがなかなか見られない。 ・豊かな暮らしを支えるための商品開発で有害物質が増え、河川が汚れている。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ○文化財保護等自然災害への対応策。 ○自然への畏怖、原子力災害にみる人災と今後の電力供給の在り方等をもう一度考え直す必要。 ○世界遺産のまち(歴史都市)と豊かな自然を守り育て、常に環境と対話しながら、災害に強い安全・安心のまちづくり。 ○未来に残す文化財の保全、生物の数を減らさない環境づくり。 ○人間が自然を操ることができるという傲慢な考えを取り除く必要。
分野別将来像を考えた理由	<ul style="list-style-type: none"> ○自分たちのずっと次の世代まで、奈良の文化財のすばらしさを知ってほしい。 ○周囲の状況に動かされる事なく、個性を生かしてゆくには、30年後、50年後、100年後も変わらない景観が人の心を癒し、生きとし生ける物の命をつないでゆくと考えます。 <ul style="list-style-type: none"> ・澄んだ空気、豊かな森、清らかな水の池や川が身近にある町に住みたい。 ・これらの自然に人が親しむことができる町。 ・地産地消の暮らせる社会で田や畑、森林が豊かで自然の恵みのなかで生きる町。 ・森や水辺、田畑には日本の在来種の動植物が生きとおり人間と共生している。 ・これらの自然景観に加えて、奈良に残る文化財の寺などの歴史的景観が残る町を保護する。 ・歴史から学ぶシンボルとしての文化財を保護、生かしている町。 ・文化財修復のための木材を地元で確保するなど、保護するための仕組みができているまち。 ○近鉄電車で生駒のトンネルを抜け、石切あたりから大阪平野を見ると緑のない廃墟のように感じます。緑の自然を郊外の山地、田畑、河川、公園、街路樹、家庭の庭木などと結び、緑の回廊で豊かな自然を取り戻し、野生動植物と共にひとも生きのびることができるオアシスのような町にできたらいい。 ○「防災や自然の脅威」「放射能物質等による空気汚染」などの問題点をもう一度取り上げなければなりません。私たち人間をはじめとした地球上の生物は地球の循環(自然の循環)の中でしか生きていくことはできません。私たちはその自然の循環の中で(私たち自身も自然の一部です)生きる知恵を祖先の生活や歴史から学び、引き継がなくてはなりません。 ○問題意識と価値観や生活スタイルの見直しを考える際、従来型の発想では、歴史的な課題に応えきれないと考えます。まずは、「災害に強いまち」へ全力で取り組み、その中で、「環境保全」「暮らしの在り方」「エネルギー」「都市環境」「生活環境」を考えるべきでしょう。「自然・歴史を活かし、環境と対話する安全・安心な都市」が実現すれば、文字どおり、市民が安心・安全に暮らしながら歴史都市の中の生活で幸せを感じるでしょう。

生活環境	委員：瀬林（リーダー）、栗岡（サブリーダー）、池田、井上 ^幹 、 小松、矢藤、[橋本] 事務局員：新井、杉田 []は当日欠席委員
-------------	--

- ・第5回分科会後に各委員から出された分野別将来像をみると、①地域コミュニティに関するもの、②空気・水などの環境に関するもの、③3R・循環型社会という3つに大別できる。
- ・①の地域コミュニティに関するもの（分野別将来像資料：4/14ページの一段目）については、都市環境や環境教育の分野などにもかかることであり、各分科会の将来像というよりも、その上位にくる全体的な目標になるのではないかと。
 →分科会ごとの将来像を考えていくと、この地域コミュニティの部分がすっぱり抜けてしまうのではないかと不安があるとの意見もあったが、最終的には将来像にあげないこととなった。しかし、「地域コミュニティ活性化」や「協働参画」という内容は、分野別の将来像の上位にくる目標としては掲げていくべきものであるという結論に至った。
- ・②の空気・水などの環境に関するもの（4/14ページの二、三、四段目）では、二段目の「**きれいな空気・水・緑に囲まれた、安全・安心・健康・快適な生活環境の実現をめざす**」という将来像が他の二つの将来像の内容も含んでいることから、この将来像に決定することとした。
 →話し合いの中で、キャッチフレーズとしては少し長いので短くすることも考えたが、後から修正等できることからこの段階ではそのままの形で出すことにした。
 →また、「奈良市の環境」の中に環境基本計画の進捗状況やP D C AのC Aの部分や環境マネジメントシステムについて入れてほしいという意見があったが、環境審議会などでも言われており、事務局としても当然入れる方向で動いていることを説明した。
- ・③の3R・循環型社会（4/14、15ページの五、六、七、八段目）については、六段目の「**貴重な資源・エネルギーを浪費せず、可能な限りの再利用と徹底したリサイクル、廃棄物処理コストの最小化を志向する**」という将来像をもとに考えた。
 →「**廃棄物コストの最小化**」というのは、将来像の次の段階の施策になってくるので、入れない方がいい。
 →「～を浪費せず、～の再利用と徹底したリサイクル」という文言は、「大切にする」という文言に集約できる。
 →以上の意見をまとめて、「**資源・エネルギーを大切にすま**ち」という将来像に決まった。

都市環境	委員：石田（リーダー）、北浦（サブリーダー）、河野、三宅 [上市、向出] 事務局員：油谷、松本 []は当日欠席委員
-------------	---

始めに、第5回分科会で各委員から出された分野別将来像についての説明があった。

（別紙資料6/14、7/14ページ参照）

その後、当分科会として最終的に将来像へ繋がるであろう意見・キーワードをふせんに書き発表用紙へ貼った。キーワードは以下の通り。

- ・安全、安心で住みやすくずっと暮らせるまち
⇒潤いのあるまちが崩れてきている等の意見から。安全、安心についてはほとんどの委員が書いている。
- ・清潔感のあるまち、クリーンなまち
⇒生活のゴミ関係を意識した都市環境作りが必要。ごみの処理について最終が見えてこないなど市民の声を繁栄して。
- ・景観（歴史と自然）を活かした品格のあるまち
⇒奈良にある多くの世界遺産や自然を守り将来へ引き継いでいくために必要である。
- ・連帯のあるまち
⇒農山間地域と市街地の互いの良さを活かしたまち作りは必要。
- ・どこでも、だれもが（一人ひとり）歩いて気持ちの良いまち
⇒「弱者」や「小さい者」に合わせた環境作りや、公共交通網、ライフラインの整備の重要性から。

上記意見をまとめて、

**「農山間地域と市街地のよさを活かし、
だれもがいつまでも安全で安心して暮らせるまち」**

という将来像にまとまった。

※各委員からは、分野別将来像を一つの短い言葉で必ずまとめなければならないのか？という意見が数多く出た。

後から修正出来る事もあり、この場では上記のように一つの長い将来像にまとめた。但し、この将来像の中身には上で述べてきたような内容を含んでいる。

地球温暖化対策	委員：北端（リーダー）、田川、鶴保（サブリーダー） 清水、植本、村木、[松本]
	事務局員：柴田、坂崎 []は当日欠席委員

最初に各委員による分野別将来像の説明等を行った。

○エネルギーについて

- ・市民の使うエネルギーについてはバイオマスなどを利用していけば十分に足りるだろう。
- ・自然エネルギーや再生可能エネルギー等をミックスしていったほうが良いであろう。
- ・節約や我慢だけでなく（節約も大事ではあるが）、生活なども維持しながら省 CO2 を進めていく省エネの仕組みを作っていく（個の努力+機器の選択）
- ・各個人の省エネだけでは大きな削減の達成は難しいだろう（個人にのみ大きな負担が生じるのもどうであろう）。交通における省エネについては、車に乗せない道路作りや駐輪場作りなどの誘導策をするなどの社会作りが必要
- ・いわゆる「エネルギーの地産地消」をしていくべきである。（ドイツにおいてはエネルギーを 23% 程度カットした実績がある）
- ・農作物や間伐材のエネルギーの資源化を行えば余地が十分あるのでは
- ・ありとあらゆる再生可能エネルギーを利用する余地は残っている（太陽光温水器など）
- ・木材などの自給をしていく（外国産の低価格の木材については輸送コストなどを価格に上乗せする）
- ・経済、環境、市民生活などのベストミックス

意見（宿題や説明）の中では『低炭素社会』や『持続可能な社会』という言葉が多かった。これらの言葉は、普段使用する言葉ではないのでいわゆるお役所的な感じがする。

『低炭素社会』については昔の生活に戻れば良いということも言える。経済が大きく衰退してしまわない方法で温暖化対策は出来ないだろうか？

『持続可能』という言葉は、豊かな生活の維持ではなく「生存の持続」という意味である。

『省エネルギー』よりも『低エネルギー』な社会を構築しなければならない。（低エネルギーは必要最低限のエネルギーを自ら作り出す（エネルギーの地産地消？）という意味。聞きなれない言葉、うまく広めていきたい）

キャッチフレーズとしては今後施策的にいろいろな方向にむかえるように「エネルギー」など文言を特化しないほうが良いのでは、となると硬い表現ではあるが「低炭素社会」「持続可能な社会」のほうが良いのではないだろうか。

などの意見があった。

今後、奈良市においてポジティブに「低炭素社会」を構築していくということで、

【古都奈良でめざす低炭素社会】

とした。